

る様になつてきた。就中歴史の形態の一つである傳記がこの論争に就いて最も多く動かされて、一時は時代が優位を占めて偉人が抹殺されるに至つて傳記編纂亦無意味なものになつた事もあつたが、近時は歴史的社會的なるもの、實在を主張すると共に、之を實踐に移すものとしての偉人の意義をも認識される様になつて來て、個人の傳記編纂の究極の意義が認められるに到つた。而して本書は三篇より成り、後醍醐天皇北畠親房北畠顯家に別れてゐるが、本編として論ぜられる親房の功績よりも辯編として説かれてゐる後醍醐天皇の御理想の方に、著者が歴史的意義を付してゐる點に先の問題に付いて注意の深さが思はれる。公家一統政治の實現の理想の爲に何物にも屈せられなかつた天皇の信念が遂には新しい時代を生んだものであり、親房はその翼賛者として常に天皇を助け奉り一面現實に即する事を忘れなかつたものであると説かれてゐる點に本書論述の重點があると考へてこの點を明らかにする事によつて更に過渡期としての南北朝時代が更に深く理解されるものと信ずる。(菊版四二

二頁、京都星野書店發行、定價金參圓)〔赤松〕

●史蹟調査報告 第五、第六輯

文部省宗敎局編

史蹟名勝天然記念物保存法の施行以來、史蹟として指定されてゐるもの約二百個所に達してゐる。大正十五年以降其局では指定に必要な調査を主とした題目の報告と別に學術的調査を主とした精査報告を刊行して逐次この記念すべき史蹟の國家的臺帳を作成しつゝある。今、題記の第五輯には昭和四年度に指定を受けた千葉、愛知、山梨、岐阜、岡山、山口各縣下のうち十ヶ所を、其の第六輯には次年度指定の京都、神奈川、千葉、三重、福島、岐阜、長野、福井、石川、富山、岡山、山口縣の十七ヶ所を記録する。一々の史蹟の目次を擧ぐることは省略するが、此種の報告は各縣の史蹟調査報告を容易に入手し難い者にとつて便益を受く處が多い。此機に際し全般に互る指定史蹟を要約した一覽表的なもの、刊行を望むものである。

●漢三國六朝紀年鏡集録

梅原 末治著

前漢居攝元年鏡以下東魏天平三年鏡に至る約七十面の紀年鏡の個々の解説と最も正鵠な銘辭の解讀を與へ附するに一覽表を以てしてゐる。鏡鑑研究上更に銘字上の考察に主要な據點をなすと共に支那の金石學上に資する所の多いものであらう。(定價壹圓五拾錢、東京神田、岡書院發行)

●慶州金鈴塚飾履塚發掘調査報告 圖版

大正十三年五、六の兩月に互り梅原末治、小泉顯夫氏等の發掘にかゝる慶州路東里の二古墳の調査報告に添ふ圖版が大正十三年度古蹟調査報告第一冊として本文に先だち刊行された。二古墳の内容に就いては近く本文の發刊さるゝに譲ることゝするが、今、圖版を通じて見る二古墳の内容が曩きに發表されたる金冠塚のそれに劣ることのない遺物を包藏することに於いて新羅文化を如實に示し、南韓に於ける基本的資料を更に提供するものに外

ならないと思ふ。

●慶尙北道達城郡達西面古墳調査報告

題目の調査報告が大正十二年古蹟調査報告第一冊として朝鮮總督府から刊行された。即ち大邱市街の西方丘陵上に存在する數十基の古墳群中七基を發掘調査して野守健、小泉顯夫兩氏によつて報告されたものである。本文を十章に分ち總説、古墳群の配置、古墳調査の經過の各章に次で六墳のそれゝに發掘の經過、石槨構造、遺物の配置、遺物の各節を詳述する六章と最後に結論を以てしてゐる。附するに同面飛山洞の一古墳の調査報告がある。

各墳墓に副葬する遺物は金冠を主幹とする裝身具を始め武器、馬具に至るまで從來發掘調査せられた慶州、梁山、昌寧所在の著名な墳墓の副葬品と略々同一であつて遺物上からは支那南北朝時代の文化の影響を多分に受けた南韓古新羅時代のものに包括せられるが、墳墓の構造に於いて木槨積石塚等を見るなく、石槨に於いて稍々特

異性を有する石槨墳であることに兩者の間に地方差を認め、畢竟本地域の墳墓は在來の史前墳墓の傳統を受けた構築に歸するものであらうとされてゐる。

いづれにしても墳墓の構築に特殊性を指適されてゐることは本報告を更に價值づけるものであらう。

● 歐米に於ける支那古鏡

梅原 末治著

題目の示す様に著者の歐米滯留三年に囑目せられた千數百の支那鏡鑑を基本として鏡鑑に對する新知見を論述されたものである。附するに學的價値の多い新資料約百二十面を鮮明な圖版として提供されてゐる。本文の内容は歐米に於ける支那古鏡と歐米に於ける唐鏡に就いての二題目に分ち前者は更に序説、亞米利加に於ける支那古鏡、歐洲各地の支那古鏡、考古學上のフンドと仿製鏡の起源、鐵鏡、鍍金鏡及び方鏡の新資料、所謂隋鏡に就いて、複製古鏡の性質と其起源の八項とし、附録として歐米に齎された日本出土の古鏡外二篇がある。

支那古鏡の研究が輒近著しく擡頭したことは著者の努力の與つて大なることは誰れ人も疑はない處であらう。他方歐米の斯學者は其優秀な資料を獲得して新見解を開拓し彼の秦銅器の提唱などは其著しい所産である。此の機運に會した著者は學的價値の最も正確な資料に基いて上述の支那鏡鑑に對する考察を舉げたものであつて、單に圖版のみに就いても斯學者の容易に見聞することの出來ない資料を網羅されてゐることは更にこれより受くる貢獻の多大なことは云ふ迄もなからう。(定價八圓五拾錢、東京神田、刀江書院發行)

● 高句麗時代之遺蹟圖版上下冊

朝鮮總督府古蹟調査特別報告第五冊として表記遺蹟調査の圖版上下兩冊が公刊された。其裝幀に於いて前冊の「樂浪郡時代之遺蹟」と姉妹編をなすものであつて、調査委員も亦た同様に關野博士、谷井、栗山、小場、小川、野守の諸氏これを擔當されてゐる。近く本文の刊行を見るべきものであらうが、兩冊には各所の土城以下寺址、

古瓦から一切の墳墓を網羅してゐる。從來此種の内容を部分的に包括してゐる「朝鮮古蹟圖譜」等に容易に接することの出来ないものにとつて如實に展覧することが出来るものであつて、斯學者を便することは云ふまでもない。

●日本石器時代植物性遺物圖錄

喜田貞吉、杉山壽榮男共編

題目のものは陸奥國三戸郡是川村中居の遺跡から植物の果核を始め其加工品が石器及土器と混在して發見した特殊な遺物を主とした圖錄である。この遺跡に就ては既に數年前から注視せられ興味ある資料の發見は必然的に東北地方の石器時代觀に幾多の新知見を齎らさんとしてゐるものである。喜田博士は其見解を次の如く述べられてゐる「思ふに是等の遺物を留めた我先住民族は單に或る事情の下に金屬利器を自由に製作使用するを得なかつたが爲に依然として石器時代の狀態に踏み止つて居たとは云へ、其の隣人としては既に金屬文化に住する先進民族を有し、彼等も不充分ながら刃物を入手して工藝品の

製作に従事したのであつた事が、其の遺物の檢討から證明される。随つて其の時代は當然本州に於ける石器時代の末期に屬し、實年代に於ても案外下つた時代のもので其民族的所屬が、日本歷史上所謂蝦夷系統のものであつた事は疑を容れぬ。恐らく彼等は其後遠からず日本文化を移入し、日本民族に混入して跡を絶つに至つたものであらう」云々としてゐる。因に植物性遺物の主要なものには漆塗飾弓、漆塗木太刀、篋狀木製品、漆塗脚付杯、櫛、耳飾、腕輪、容器等であり。伴存土器は龜ヶ岡式縄紋土器等であつてこれを四六倍判四十四葉に收載したものである。(定價拾五圓、東京神田、刀江書院發行)〔以上島田〕

●元寇の新研究

池内 宏著

蒙古襲來即ち所謂元寇が、我國史上に於ける外寇の一大事件たるのみならず、支那史上に於ても亦注意すべき對外事件の一つである事は世人周知の事である。この重大